

# 参考文献からみたグループワーク研究

黒木保博

わが国にグループワークが本格的に導入されて以来、三〇年を経過した。

一九四九年（昭和二四年）厚生省主催のD・サリヴァン教授（アメリカ・ワシントン州カトリック大学）による「グループワーク講習会」が三週間にわたって開かれたのが、導入の始まりとされている。

グループワークは他の二方法（ケースワーク、コミュニティ・オーガニゼーション）とともに主な社会福祉方法論といわれてきたが他の方法に比べて「いまだに定着していない」とか、「わが国においては不毛の方法であった」などと従来から指摘されてきた。

この三〇年間のわが国のグループワーク研究の参考文献数を一〇年ごとにとまとめてみると次のようになる。（表1）

この表から、グループワークの研究・実践が遅れているといわれつつも、年を経るごとに研究者・実践者によって数多くの地道な成果が発表されていることがわかる。

〔表1〕

	著書・翻訳書	論文・資料	計
1948~1959	19	17	36
1960~1969	17	22	39
1970~1979	35	61	96
計	71	100	171

特に一九七〇年代後半のグループワーク研究はめざましいものがあるといえよう。

今回は参考文献からみた三〇年間のグループワーク研究をとりあえず一〇年ごとに三つの時代に区分し、その変遷を辿ってみたい。あえてこのような形で資料を紹介するのはグループワーク研究に

おいてはいままで参考文献が、特にグループワーク研究の論文がまとめて紹介されていないということからである。

現在までに参考文献がまとまっ

た形で紹介されているものとしては次のものがある。

・永井三郎「グループワーク研究の指針」（国立社会

教育研究所、一九六六年)

永井はこの中で日本語と英語の部に分けたグループワーク参考書を約二六〇点(追補も含む)紹介している。また、グループワーク研究の際の指針となるべき項目をかかげ、参考書の内容をその項目別に詳細にわたって整理している。

・窪田曉子 「アメリカにおけるグループワーク主要文献Ⅰ」  
『社会事業研究』創刊号、一九七二年)

一九三〇年から一九五五年にわたるアメリカのグループワーク研究文献が紹介されている。

・硯川征時 「時代史的にみた社会福祉の専門技術」(西九州大学社会福祉学科研究室『九州社会福祉研究』創刊号、一九七六年)

この中では、わが国のソーシャルワークの方法論文献の変遷過程がその時代背景との関連において詳しく紹介されている。

その他、岡本民夫 「戦後日本における社会福祉関係文献目録」(熊本短期大学付属社会福祉研究所『所報』第六号、一九七七年)においてグループワークの文献が三七点紹介されている。また、東京都老人総合研究所社会学部「老年研究文献目録—社会科学編—一九七三年—一九七七年」(同研究所、一九七八年)には「処遇方法」の項目において老人グループワークに関連する文献が紹介されている。

以下、一〇年ごとの参考文献の紹介と紙面の都合でその時代の傾向を簡単に整理しておきたい。

参考文献からみたグループワーク研究

一 戦前の参考文献として、次の論文がある

(1) 川上賢度 「社会事業技術としてのケース・ワーク及びグループ・ワーク」『社会事業』第一九卷第一〇号、一九三六年) 三九—四四頁

(2) 布川静淵 「社会事業に於ける技術性の確立と従業者の問題」『社会事業』第一九卷第一〇号、一九三六年) 四五—五一頁

(3) 三好豊太郎 「社会事業と技術との問題」『社会事業』第一九卷第一〇号、一九三六年) 二六—三二頁

(4) 竹中勝男 「厚生事業に於ける人とその養成の問題」『社会事業』第二五卷第九号、一九四一年) 八八—九五頁

(5) 谷川貞夫 「社会事業技術と従事者の養成」『社会事業』第二五卷第九号、一九四一年) 八九—九〇三頁

(6) 竹内愛二 「社会事業技術と従事者の養成」『社会事業』第二五卷第九号、一九四一年) 九〇—九一三頁

二 一九四八年(昭和二十三年)～一九五九年(昭和三十四年)

(著書・翻訳書)

(7) 谷川貞夫 『グループワーク概説』日本社会事業協会、一九四八年

(8) 文部省青少年団体委員会編 『青少年指導の手引』文部省、一九四九年

(9) 永井三郎 『グループワーク—小団指導入門—』日本YMCA同盟出版部、一九四九年

参考文献からみたグループワーク研究

- (10) 竹内愛二 『グループ・ウォークの技術』中央社会福祉協議会、一九五一年
- (11) 永井三郎 『グループ・ディスカッション(YMCA青年指導書)』日本YMCA同盟出版部、一九五一年
- (12) 日本グループ・ダイナミックス学会編 『グループ・ダイナミックスの研究』理想社、第一集 一九五一年、第二集 一九五四年、第三集 一九五五年、第四集 一九五八年、第五集 一九六一年、第六集 一九六二年
- (13) 文部省青少年団体委員会 『青少年グループ活動のプログラム』有明堂、一九五一年
- (14) 奈良 仁 『グループ指導者の諸問題』日本YMCA同盟出版部、一九五二年
- (15) 中田正一 『農村におけるグループ活動』文教書院、一九五四年
- (16) 早坂泰次郎・牛窪 浩 『グループワーク―精神衛生の社会心理学―』日本学生協会、一九五七年
- (17) H・B・トレッカー著 『ソーシャル・グループワーク』永井三郎訳 日本YMCA同盟、一九五七年
- (18) 加賀美文一 『新しい人間関係とソーシャル・グループ活動』横浜YMCA、一九五七年
- (19) 関 計夫 『グループ・ダイナミックス―人間関係の診断』牧書店、一九五七年
- (20) 水原泰介 『集団の力動過程』中山書店、一九五八年

- (21) 松井竇夫 『リーダーシップ』ダイヤモンド社、一九五八年
- (22) 青井和夫 『小集団』誠信書房、一九五九年
- (23) 服部 正 『ソーシャル・グループワーク』ミネルヴァ書房、一九五九年
- (24) カートライト・ザンダー著、『グループ・ダイナミックス』三隅不二訳編、誠信書房、一九五九年
- (25) G・C・ホームマンズ著、『ヒューマン・グループ』馬場明男・早川浩一訳、誠信書房、一九五九年
- (論文)
- (26) 鷺谷善教 「グループ・ワークの諸問題(I)」『社会事業』第三二巻第一・二号、一九四九年、二九―三六頁
- (27) 鷺谷善教 「グループ・ワークの諸問題(終回)」『社会事業』第三二巻四・五号、一九四九年、四一―四四頁
- (28) 鷺谷善教 「グループ・ワークの盲点」『社会事業』第三四巻第一・二号、一九五一年、一五―一七頁
- (29) J・H・グラント “Some Thoughts on the Problems of Social Group Work in Japan.” (同志社大学人文学会『人文学』第四号、一九五一年) 二五―三一頁
- (30) 吉野裕子 「グループ・ワーク指導者講習会」『社会事業』第三五巻第八号、一九五二年、六四頁
- (31) M・F・ウッド「コミュニティ指導者訓練の研究」(同志社大学人文学会『人文学』第一三三号、一九五三年) 四一―七

四頁

(32) 永井三郎 「クラブに寄りつかない少年たち—非行少年のグループ指導—」(日本女子大学社会福祉学科『社会福祉』第二号、一九五五年) 一六一—二二頁

(33) 鷲谷善教 「日本社会事業の海外の影響とその消化—グループ・ワーク—」(『社会事業』第四〇巻第八号、一九五七年) 六八—七二頁

(34) 窪田暁子 「グループ・ワークの課題」(『社会事業』第四一巻第四号、一九五八年) 三七—四三頁

(35) 吉沢英子 「グループワークの基礎概念」(日本女子大学『紀要』第八号、一九五八年) 七三—八三頁

(36) 早坂泰次郎 「グループ・ワークと性格教育」(『社会事業』第四一巻第一号、一九五八年) 二—七頁

(37) 牛窪 浩 「グループ・ワークと集団づくりの問題」(『社会事業』第四一巻第一号、一九五八年) 八一—三頁

(38) 瓜巢憲三 「施設内におけるグループ・ワーク」(『社会事業』第四一巻二一—二二号、一九五八年) 一四—二三頁

(39) 牛窪 浩 「文献を通じてみた社会事業技術論の展開」(『社会事業』第四二巻第七号、一九五九年) 七一—二二頁

(40) 一番ヶ瀬康子 「アメリカ社会福祉発達史研究にかんする若干の問題提起」(日本女子大学社会福祉学科『社会福祉』第六号、一九五九年) 四六—六七頁

(41) 工藤ケイ 「変わりゆくグループ・ワークの概念」(『社会

参考文献からみたグループワーク研究

事業』第四二巻第六号、一九五九年) 一一—一六頁

(32) M・F・ウツ 「A Study of Voluntary Group Participation of Doshisha Students」(同志社大学人文学会『人文学』第四二号、一九五九年) 一一—二〇頁

この一二年間はグループワークが導入・紹介され、わが国の土壌に根をおろすための努力が実践者・研究者によって行なわれたといえよう。

冒頭に「一九四九年」を本格的導入の年としたが、研究者によつては「一九四八年(昭和二十三年)」をその年とする説もある。これは「一匹八年」に文部省主催の青少年指導者講習会が開催され、D・サリヴァンがグループワークを講義していることによるものである。

一九四八年一〇月四日から一五日まで小金井市・浴恩館にて最初のグループワーク講習会が開かれ、この講習会はその後三カ月にわたつて全国各地で開かれた。この講習会での諸講師の講義に加筆してまとめたものが、(8)文部省青少年団体委員会『青少年指導の手引』(一三五ページ)一九四九年(絶版)である。

なおこれら一連の動きについては、(57)『青少年団体史』(I二二—I三六頁)に詳しく述べられている。

D・サリヴァンは翌年厚生省主催のグループワーク講習会においても講義を担当しているが、永井三郎は一九四八年のD・サリヴァンが講義で使用した「グループ・ワーク初歩三〇則」

参考文献からみたグループワーク研究

を骨子として、(9)、『グループ・ワーク——小集団指導入門』を著わした。なおこの本を紹介する場合、時として「小集団指導入門」と誤っていることがあるが、初版本以来「小集団指導入門」であり、脱字ではない。

著者によれば、一九四九年の初版を出した頃のわが国では、いろいろな反社会的な集団の動きが社会不安の理由となっていたため、グループワークも「集団事業」と訳さず原語をそのまま用いることにした名残りだという。「グループ」の訳語がいまでは「集団」と定着しているが、当時の研究者の苦勞がしのばれる一面である。(この点に関しては著者に手紙にて回答をいただく。一九七九・一〇)

また、竹内愛二も同じくD・サリヴァンの講習会を手伝うことによる示唆と感化によって(10)『グループ・ワークの技術』を著わした。

論文発表では鷲谷善教が次々にグループワークの紹介と問題点を指摘し、戦後民主主義社会を形成する担い手を養成する方法としてグループワークの重要性を説いた。

一方では社会心理学の立場から早坂泰次郎・牛窪浩らが積極的にグループワーク研究を行なっている。

しかしながら、(77)、窪田論文にも詳しく述べられているごとく、グループワークがこの期において期待されたほどめざましい発展を遂げることはなかったのである。

工藤ケイはこのような状況の中で、グループワークの概念を

変えなければならぬことを強調している。たとえば、自然発生源集団をとりあつかうべきというグループワークの考え方に對して、人工発生源集団も必要とする時代的要請があることを(41)において指摘している。

三一九六〇年(昭和三五年)〜一九六九年(昭和四四年)

〔著書・翻訳書〕

- (43) M・H・ノールズ著『グループ・ダイナミックス入門』永井三郎訳、日本YMCA同盟出版、一九六〇年
- (44) 木原徳太郎『小集団指導』明治図書、一九六一年
- (45) 近藤唯一・大志万進治『集団と会議の開き方・進め方』文教書院、一九六二年
- (46) 青井和夫・綿貫讓治・大橋 幸『集団・組織・リーダーシップ』培風館、一九六二年
- (47) オルムステフド著『小集団の社会学』馬場明男・早川浩一・鷹取昭訳、誠信書房、一九六三年
- (48) 永井三郎『話し合いハンドブック』日本YMCA同盟、一九六三年
- (49) 中村陽吉『集団の心理』大日本図書、一九六四年
- (50) 関 計夫『感受性訓練』誠信書房、一九六五年
- (51) H・G・ジノット著『児童集団心理療法』中村悦子訳新書館、一九六五年
- (52) 三隅不二『新しいリーダーシップ—集団指導の行動科学—』ダイヤモンド社、一九六六年

- (53) 関 計夫 『グループ・ワークの理論と方法』明治図書、一九六六年
- (54) G・コノブカ著 『収容施設のグループ・ワーク』福田垂穂訳 日本YMCA出版部、一九六七年
- (55) G・コノブカ著 『ソーシヤル・グループ・ワーク』前田ケイ訳、全国社会福祉協議会、一九六七年
- (56) 世戸 望 『青少年活動とグループ・ワーク』日本生命済生会、一九六八年
- (57) 中央青少年団体連絡協議会 『青少年団体史』同協議会、一九六九年
- (58) 窪田堯子 『グループワーク』誠信書房、一九六九年
- (59) K・W・J・キープル著 『ニス・ワーカー!』永井三郎訳、日本YMCA同盟、一九六九年
- 〔論文・資料〕
- (60) 福田垂穂 「ソーシヤル・グループ・ワークの基本問題」(一) (明治学院大学文経学会『明治学院論叢』第五六号、一九六〇年) 二五―三八頁
- (61) 竹内愛二 「グループ・ワークの個人的集团的及び社会的意義・役割」(関西学院大学『人文論究』第一〇巻第四号、一九六〇年) 一―二四頁
- (62) 戸谷美佐子 「組織キャンプと肢体不自由児の交友関係」(日本女子大学社会福祉学科『社会福祉』第七号、一九六〇年) 六一―七四頁

参考文献からみたグループワーク研究

- (63) 大塚達雄 「社会福祉における学生ヴォランティアの訓練―京都YMCA肢体不自由児サーヴィス・グループを中心として―」(同志社大学人文学会『人文学』第四六号、一九六〇年) 一四四―一六七頁
- (64) 鷲谷善教 「グループ・ワーク論」(日本社会事業大学『社会事業研究所年報』第一号、一九六〇年) 一八一―二六頁
- (65) 福田垂穂 「ソーシヤル・グループ・ワークの基本問題」(一) (明治学院大学文経学会『明治学院論叢』第六〇号、一九六一年) 一一―七頁
- (66) 福田垂穂 「ソーシヤル・グループ・ワークの基本問題」(二) (明治学院大学文経学会『明治学院論叢』第七七号、一九六三年) 一一―七頁
- (67) 阿部志郎 「ソーシヤル・グループワーク」(社会福祉研究会編『社会福祉の方法』誠信書房、一九六四年) 一一八一―一三八頁
- (68) 福田垂穂 「ソーシヤル・グループワーク」(若林龍夫編『社会福祉方法論』社会福祉講座第一巻、新日本法規出版株式会社、一九六五年) 六九―一四〇頁
- (69) 吉沢英子 「児童収容施設におけるチームワークの諸問題」(日本女子大学社会福祉学研究会『社会福祉』一九六五年) 四五―五三頁
- (70) 阿部志郎 「ソーシヤル・グループワーク」(木田・竹中・副田編『改訂・社会福祉の方法』誠信書房、一九六六年)

参考文献からみたグループワーク研究

- 九六一—一九九頁
- (71) 吉沢英子・秋山弘子 「大都市周辺地域における地域福祉活動の諸問題」(日本女子大学『社会福祉』、一九六六年) 一—二二頁
- (72) 石井哲夫 「一時保護所におけるグループ・ワーク」(社会事業所『年報』、一九六六年) 四七—五一頁
- (73) 竹内愛二 「グループ・ワークの教育的および治療的役割と発展」(竹内著『実践福祉社会学』弘文堂、一九六六年) 八二—一〇二頁
- (74) 永井三郎 「グループワーク研究の指針」(国立社会教育研修所、一九六六年)
- (75) 服部 正 「ソーシャル・グループワーク的視点における産業体育の効用性」(大阪社会事業短大『社会問題研究』第一六巻第一・二号、一九六六年) 九〇—一一〇頁
- (76) 福田垂穂・花村春樹・孤嶋圭子 「インターループ・カウンスルを媒体とするグループワーク展開の事例的研究」(明治学院大学文経学会・研究年報『明治学院論叢2』、一九六七年) 四五—一〇四頁
- (77) 窪田暁子 「ソーシャル・グループワーク成立の要件」(日本社会事業大学編『戦後日本の社会事業』勤草書房、一九六七年) 九七—一二三頁
- (78) 森井利夫 「勤労少年に対するグループワーク的接近(その一)、勤労少年の余暇とニード、―板橋区内勤労少年調査

を中心に―」(『淑徳短期大学学報』、一九六八年) 一一二—一三七頁

(79) 吹田盛徳 「ソーシャル・グループ・ワーク」(日本社会事業研究会編『新版・社会事業要論』ミネルヴァ書房、一九六九年) 一四四—一五三頁

(80) 窪田暁子 「社会福祉の『方法』をめぐって」(日本福祉大学社会福祉研究所『福祉研究』第三二号、一九六九年) 三一—八頁

(81) 石川淑郎・加藤寛・窪田暁子 「アルコール中毒者のグループワーク」(木島恵一・岡堂哲雄編『集団心理療法』金子書房、一九六九年) 一八〇—二〇〇頁

一九六〇年代におけるグループワーク研究の特徴として、今日でもわが国のグループワークの専門書として用いられているG・ユノブカの著書二冊が翻訳され、(54)、(55)、これらまでと異なる実践・研究が志向され始めたことがある。特に、治療的グループワークには大いに刺激影響を与えたと思われる。

また、グループワークに有効な集団に関する研究が次々に発表されている。

グループワーク研究者としては、理論的にグループワークの体系化をめざした福田垂穂の業績があげられる。(60)、(65)、(66)、(68)、(76)、

また、竹内愛二も福祉社会学研究の中で意欲的にグループワーク研究に取り組んでいる。(61)、(73)、

窪田暁子は、(77)、(80)、(81)、の論文と(58)の『グループワーク』を著わし、わが国のグループワーク実践の方向性を積極的に打ち出している。

この時期は、窪田の指摘にもあるように、(77)、戦争直後のグループワークに対する要求・期待とは質的に全く異なったグループワーク研究となり、あらゆる分野での小集団活動導入とともに、グループワークを活用する研究・実践分野が拡大されていく。たとえば、(62)、(63)、(69)、(71)、(72)、(75)、(76)、(78)、(81)、などにみられている。

このことは、一九六〇年代にはグループワークに対する批判も一段と強くなってきたため、それぞれの研究者・実践者がこれに対応すべく取組んでいった現われであったといえよう。

#### 四 一九七〇年(昭和四五年)～一九七九年(昭和五四年)

##### 〔著書・翻訳書〕

- (82) G・コノブカ 『非行少女の心理―ミネソタにおけるグループ・インタビュより―』窪田暁子・服部広子訳、新書館、一九七〇年
- (83) O・ティード 『リーダーシップ』上田哲訳、創元社、一九七〇年
- (84) 巡 静一 『集団づくりゲーム』明治図書、一九七一年
- (85) 清水盛光 『集団の一般理論』岩波書店、一九七一年
- (86) R・ベイルズ 『グループ研究の方法』友田不二男編・手塚郁恵訳、岩崎学術出版社、一九七一年

##### 参考文献からみたグループワーク研究

- (87) F・R・シャフテル、G・シャフテル『ロールプレイング集団による問題解決法』西川一廉訳、ミネルヴァ書房、一九七一年
- (88) カートライト他編著 『グループダイナミックスⅠ・Ⅱ』三隅二不二・佐々木薫訳編、誠信書房、一九七一年
- (89) 小関康之 『児童グループワークと集団あそび』日本YMCA同盟出版部、一九七二年
- (90) M・オールセン 『グループ・カウンスリング』伊東博・中野良顕訳、誠信書房、一九七二年
- (91) 児童グループワーク研究会 『児童グループワーク』タムス社、一九七二年
- (92) C・R・シニバーズ 『スモールグループ』馬場明男・早川浩一・鷹取昭訳、川島書店、一九七二年
- (93) 武田 建 『グループワークとカウンスリング』日本YMCA同盟出版部、一九七三年
- (94) C・ロジャース 『エンカウンター・グループ』島瀬稔・直子訳、ダイヤモンド社、一九七三年
- (95) W・R・ピオン 『グループ・アプローチ』対馬忠訳著、サイマル出版会、一九七三年
- (96) 小関康之 『児童グループワーク』ミネルヴァ書房、一九七四年
- (97) 広田君美・永田良昭他 『小集団をみつめて』人間の科学社、一九七四年

参考文献からみたグループワーク研究

- (98) 松本 勉・吉沢英子 『小集団活動の理論と実際—グループリーダーのために—』富士福祉事業団、一九七四年
- (99) 大塚達雄編著、井岡勉・木内正一著 『社会福祉の専門技術』ミネルヴァ書房、一九七五年
- (100) 松本 勉・大場敏治・坂野公信 『レクリエーション活動とグループワーク』相川書房、一九七五年
- (101) 東京都老人総合研究所 『グループワーク事例集(1)』一九七五年
- (102) 思想の科学研究会 『集団・サークルの戦後思想史』平凡社、一九七六年
- (103) R・シロカ、E・シロカ、G・シェロックス 『グループ・エンカウンター入門』伊藤博・中野良顕訳、誠信書房、一九七六年
- (104) 関 計夫 『統・感受性訓練』誠信書房、一九七六年
- (105) M・ジェイムス、D・ジョンソフオード 『自己実現への道—交流分析の理論と応用—』本田明寛・織田正美・深沢道子訳、社会思想社、一九七六年
- (106) G・W・T研究会編 『グループワーク・トレーニング』遊戯社、一九七六
- (107) 高橋精一 『福祉施設における集団指導のあり方』弘学出版、一九七八年
- (108) W・シュワルツ、S・R・ザルバ著 『グループワークの実際』前田ケイ監訳、相川書房、一九七八年

- (109) H・U・フィリップス 『グループワーク実践の基礎』花村春樹訳、相川書房、一九七八年
- (110) 上田利男 『小集団活動』総合労働研究所、一九七八年
- (111) 鈴木栄吉 『小林弥太郎とY M C A ボーイズクラブ』東京キリスト教青年会、一九七八年
- (112) 三隅二不二 『リーダーシップの行動科学』有斐閣、一九七八年
- (113) 東京都老人総合研究所 『グループワーク事例集(2)』、同研究所、一九七八年
- (114) 岡村重夫・高田真治・船曳宏保 『社会福祉の方法』勁草書房、一九七九年
- (115) 船曳宏保 『現代社会福祉原論』新評論社、一九七九年
- (116) 福田垂穂・前田ケイ・秋山智久編 『グループワーク教室—集団の活用による人間性の回復を探る—』有斐閣、一九七九年
- (論文)
- (117) 森井利夫 「グループワークの現代的意義」(淑徳大学『研究紀要』第四号、一九七〇年)二七—五〇頁
- (118) 吉沢英子 「ソーシヤル・グループワークの成立過程とその展開について」(日本女子大学『紀要』文学部二〇号、一九七〇年)五一—六四頁
- (119) 豊福義彦 「ソーシヤル・グループワーク」(重田信一編著『社会福祉の方法』川島書店、一九七一年)

- (120) 阿部志郎 「隣保事業施設とグループワーク」(『少年補導』第一六卷三号、一九七一年)
- (121) 竹内愛二 「新しいグループワーク序説」(『少年補導』第一六卷三号、一九七一年)
- (122) 菅 良介 「学童保育所のグループワーク」(『少年補導』第一六卷三号、一九七一年)
- (123) 小島蓉子 「ソーシヤルワークとグループワーク」(『教育と医学』第二〇巻第七号、一九七二年) 四二―四九頁
- (124) 垣内芳子 「老人クラブの活動―G・W、R・Wの理論を基盤としての一考察」(日本社会事業大学研究紀要『社会事業の諸問題』第二〇集、一九七二年)
- (125) 硯川征時 「日本におけるグループワーク」(佐賀家政短大『紀要』、一九七二年)
- (126) 窪田暁子 「アメリカにおけるグループワーク主要文献 I」(『社会事業研究』創刊号、一九七二年) 一九七―二二一頁
- (127) R・D・ウィンター、"The Essential Components of Social Group Work Practice": 大利一雄邦訳「ソーシヤル・グループワークを構成する基本要素」(小松源助監訳『社会福祉論の展望(下巻)』ミネルヴァ書房、一九七二年) 六一―八六頁
- (128) 大利一雄 「老人グループワーク(1)(2)(3)」(『老人ホーム』二〇・二二・二三号、一九七二、一九七三年)
- (129) 岩田 茂 「老人ホームのグループ指導」(『老人ホーム』

参考文献からみたグループワーク研究

- 三一号、一九七三年) 三六一―四三頁
- (130) 保田井 進 「アルコール中毒者のグループ活動と教会のアプローチについて」(日本基督教社会福祉学会『基督教社会福祉研究』第六卷一号、一九七三年)
- (131) 大利一雄 「北米グループワークの展望」(『青年問題研究』二二号、一九七三年) 四〇―五一頁
- (132) 高司員、荒木照子、田中未来 「グループワーク的働きかけ」(吉田宏岳他編著『実践としての社会福祉』川島書店、一九七三年) 九六一―一五八頁
- (133) 花村春樹 「グループワーク研究の動向と課題」(花村・田代編『社会福祉研究の課題』ミネルヴァ書房、一九七三年)
- (134) 花村春樹 「治療的グループ・ワークに関する考察(下)」(東北福祉大学社会福祉学会『東北福祉大学論叢』第一三巻、一九七四年) 一九―三一頁
- (135) 秋山智久 「老人ホームにおける人間関係と生活―カルタ作りのグループワークより」(『月刊福祉』五七号、一九七四年)
- (136) 真野元四郎 「保健所におけるグループワーク活動の展開―その経過概略の報告―」(『看護技術』メデカルフレンド社、一九七四年二月) 六一―七〇頁
- (137) 猪口研二 「特養における居室中心のグループワーク」(『老人ホーム』三六号、一九七四年) 四一―四四頁
- (138) 山口富啓 「ケースワーク、グループ・ワーク、セラピ

参考文献からみたグループワーク研究

1の基本的手法と活動(1)(2) (『老人ホーム』四四・四五号、一九七四年)

(139) 松井二郎 「アメリカ・ソーシャル・ワーク理論の最近の動向」(北星学園大学『北星論集』第一号、一九七四年) 五一―七七頁

(140) 増原良二 「よきグループワーカー、ケースワーカーとして」(『児童養護』第五卷第二号、一九七四年) 二〇―二三頁

(141) 坂口順治、宮崎俊策 「小集団活動における主体性確立への二試論」(東洋大学社会学部『紀要』一一・一二、一九七五年) 一一九―一四七頁

(142) 浅野 仁 「老人グループワークの視点」(東京都老人総合研究所『グループワーク事例集(1)』、一九七五年) 八一―一〇六頁

(143) 硯川征時、上田 学 「肢体不自由療育におけるグループワーク」(永原学園(西九州大学・佐賀短大)『紀要』第六号、一九七五年) 四九―五四頁

(144) 秋山智久 「ソーシャル・グループワークの新しい方向―米国における五つのモデルを中心に―」(相川書房『ソーシャルワーク研究』一九七五年) 二一―六頁

(145) 花村春樹 「治療グループ・ワークに関する考察(一)」(東北福祉大学社会福祉学会『東北福祉大学論叢』第一四卷、一九七五年) 一一―三頁

(146) W・シュワルツ著、前田ケイ抄訳 「ソーシャルワーク

実践におけるグループの活用」(『ソーシャルワーク研究』一九七五年) 一七―三二頁

(147) 大利一雄 「グループワーク入門」(『少年補導』一九七五年六月より一二回連載)

(148) 山中豊子・真野元四郎・楠 典子 「保健所における精神障害者のグループワーク(I)―吹田保健所における試み、第一報―」(大阪公衆研究所報、精神衛生編) 第一三三号、一九七五年) 七五―八七頁

(149) 池田尚子 「特養のグループ活動について―清鈴園におけるグループワーク導入の試み―」(『老人福祉』第四八号、一九七五年)

(150) 荒賀文子・中山霞・長尾輝子・森正宏・西川京子 「保健所における精神障害者のグループワーク(II)」(『大阪府立公衆研所報、精神衛生編』、一九七五年)

(151) 吹田盛徳 「ソーシャル・グループワーク」(『社会福祉要論』ミネルヴァ書房、一九七五年)

(152) F・E・ヴィツカリ、(冷水豊訳) 「海外の老人福祉サービス(グループワーク)」(『老人生活研究』五三―五四号、一九七五年)

(153) 坂口順治 「社会変動と小集団」(日本YMCA研究所『紀要』Vol. II, No. 2, 一九七六年) 五三―六三頁

(154) 硯川征時 「時代史的にみた社会福祉の専門技術」(西九州大学『九州社会福祉研究』、一九七六年) 五二―七六頁

- (155) 熊谷久美子 「児童館でのグループワーク」(『少年輔導』四月号、一九七六年) 六九―七六頁
- (156) 宮崎俊策 「T・グループとグループ・ワーク」(熊本短期大学付属社会福祉研究所『社会福祉研究所報』第五号、一九七六年) 一七―二六頁
- (157) 村山朋子 「生活の場づくりのために導入したグループワーク」(『老人ホーム』六五号、一九七六年)
- (158) 岡村重夫 「方法論統合化の意義」(『社会福祉研究』一九号、一九七六年)
- (159) 岡村重夫 「社会福祉方法論再考覈え書」(吉田久一編『戦後社会福祉の展開』ドメス出版、一九七六年) 五三―六五頁
- (160) 平山 尚 「米国の方法論統合化の過程」(『社会福祉研究』一九号、一九七六年)
- (161) 保田井進 「集団体験によるソーシャル・ワーカーの訓練」(『西南女学院短大研究紀要』第三号、一九七六年)
- (162) 松井二郎 「ソーシャル・ワーク実践の共通基盤を求めて」(北星学園大学『北星論叢』第一四号、一九七六年) 三五一―六三頁
- (163) 川田蒼音 「ソーシャルワーク過程」(四国学院大学文学化学会『論集』三九号、一九七七年) 九五―一八頁
- (164) 米良重徳 「YMCA少年事業史」(日本YMCA研究所一九七七年度主事論文)

参考文献からみたグループワーク研究

- (165) 荒賀文子・中山 環・森 輝子 「保健所における精神障害者のグループワーク(IV)―池田保健所における試み(第二報)―」(大阪府立公衆衛生研究所報告、精神衛生編』第一五号、一九七七年) 六七―七四頁
- (166) 浅野 仁 「老人グループワーク(その一)―老人ホームの事例を中心として―」(『社会老年学』No. 5 一九七七年) 一四―二八頁
- (167) 浅野 仁・谷口和江 「老人グループワーク(その二)―老人福祉センターの事例を中心として―」(『社会老年学』No. 5 一九七七年) 三五―四九頁
- (168) 福田垂徳 「グループワークと社会変動」(明治学院大学『明治学院論叢』二四九号、一九七七年) 一七三―一九〇頁
- (169) 花村春樹 「グループ・ワーク」(仲村他編『社会福祉教室』有斐閣、一九七七年)
- (170) 山中豊子・真野典子・下田睦美・真野元四郎 「保健所における精神障害者のグループワーク(III)―吹田保健所における試み(第二報)―」(大阪府立公衆衛生研究所報告、精神衛生編』第一五号、一九七七年) 五九―六五頁
- (171) 浅尾博一・山中豊子・荒賀文子・真野元四郎 「保健所におけるグループ・ワーク(ディ・ケア)および就学援助」(『精神医学』Vol. 19, No. 8, 一九七七年) 七九七―頁
- (172) 小野哲郎 「社会福祉の方法論統合化の課題について」(明治学院大学文経学会『社会学・社会福祉学研究』四九号、

参考文献からみたグループワーク研究

一九七七年) 五七—九二頁

(173) 植田美佐恵 『社会福祉方法論』研究の動向(福岡県社会保育短大『研究紀要』第二号、一九七八年) 七七一—九六頁

(174) 垣内芳子 「集団指導の価値観に対する若干の問題」(日本社会事業大学『社会事業の諸問題』第二四号、一九七八年) 一一〇—一二四頁

(175) 森井利夫 「グループワークの教育的価値」(文教大学『紀要』第二二集、一九七八年) 三一—三八頁

(176) 井上 実 「グループワークの研究法—小集団討議の観察システム」(関東学院大学『文学部紀要』二四号、一九七八年)

(177) 保田井 進 「ケースワークとグループワーク」(大塚達雄・岡田藤太郎編『ケースワーク論』ミネルヴァ書房、一九七八年) 二三六—二五〇頁

一九七〇年代はこれまでにない数多くの参考文献が発表されている。その中で一段と明確になってきていることは一九六〇年代からの動きにもあるような多方面の領域でのグループワーク活動の活発化である。また、対象を限定したグループワーク研究・実践も行なわれている。

たとえば、「治療グループワーク」に関するものに、(130)、(134)、(145)があり、保健所で実践されている精神障害者のグループワークとして、(136)、(148)、(150)、(165)、(170)、(171)、が

ある。

また老人対象のグループワークとして、(101)、(113)の実践事例集とともに、(124)、(128)、(129)、(135)、(137)、(138)、(142)、(149)などが発表されている。

また、児童対象のグループワークとしては、(96)、(155)、などがあげられる。

さらには、一九六〇年代後半にアメリカで盛んになったエンカウンター・グループ、T・グループ、感受性訓練など多種多様のワークショップの理論と方法がわが国にも紹介され、人間関係改善のための体験的訓練として盛んになってきているが、グループワーク研究においても(156)、(161)の論文や、(106)のようにトレーニングの手びきが発表されていることも一つの新しい研究の流れであろう。

さらには、アメリカでの社会福祉方法論統合化の動きとともに、わが国の研究者にもそのような取組みがみられるようである。たとえば(99)、(114)、(115)の著書、あるいは(139)、(144)、(158)、(159)、(160)、(163)、(162)、(173)の論文に意欲的な取組みがみられる。

また、大利一雄は一連の論文において、アメリカのグループワーク研究の新しい流れを紹介している。たとえば、(127)、(128)、(131)、(147)にみられるように、R・D・ウィンターやW・シュワルツのグループワーク論について論じている。社会福祉方法論統合化の流れの中で今後、グループワークをどのよ

うに実践研究していくのかについて注目し、考えさせられるものがある。

この中であって、福田垂穂は(168)、一グループワークと社会変動」において、一九三五年第六二回全米社会事業会議におけるグレイス・コイルの「グループワークと社会変動」と題する講演の全訳を發表している。福田はわが国の今日的状況のなかでのグループワーク批判に対する反論として、グループワークの果すべき役割の必要性・重要性・有効性をもう一度基本的に考えて直していくことを意図しているように思われる。

また森井利夫は治療グループワークのみに有効性を考えがちな今日の実践・研究に対して、グループワークのもつ教育的価値を忘れてはならないことを説いている。(175)

ともあれ、一九四九年の本格的導入から三〇年を経過した今年に、わが国のグループワーク実践者研究者が(177)、「グルー

プワーク教室」という出版によって、一つの「節」をつけたことは意味深いものがある。

以上、参考文献からみたグループワーク研究の変遷を簡単に辿ってみた。これらの研究によって明らかにされた問題点、特にアメリカに理論と方法の「源」をもつグループワークをいかにしてわが国の土壌に育成していこうとしたかについて改めて論じたいと思う。

#### 〈追補〉

(178) 鈴木栄吉『青年指導の原理と実際』新生堂、一九三二年

(179) 額田みよる『グループ・ワークの実際』小団指導の仕方

―ジープ社、一九五〇年

(180) 秋山智久「児童福祉施設におけるグループワーク」(日

本児童問題調査会『子どもと家庭』第一四卷第四号、一九七七

年)二二二―二七頁